経営の道徳的問題状況を探究するための方法的基礎
－ジョン・デューイの探究理論を拠り所にして－

An Underlying Methodology of Inguiring into a Morally Problematic Situation of Business Practice

岩　田　　浩
Hiroshi IWATA

従来の経営倫理学の研究において、道徳的問題状況に直面した行為主体、わけても企業のトップがその状況を改善するために、いかに考えをめぐらすか、といった哲学的・思弁的な方法論に関する議論はほとんど注目されてこなかったように思われる。

とはいえ、道徳的判断を問われる状況に直面し、徒労に迷っている経営者が数多く見受けられる現況－－連のビジネス・スキャンダルを想起されたい－を鑑みたとき、かかる議論を等閑視することはできないであろう。こうした経営者らに道徳的意思決定に関する何らかの論理的道筋を提供することは、経営学、とりわけ経営倫理の問題を研究する学徒にとって、ひとつの重要な研究課題であると考えられる。本稿は、このような問題意識からの一考察である。

さて、こうした経営倫理学の未開の研究領域に対して、本稿ではプラグマティズムの哲学者、ジョン・デューイの「論理学（＝思考の方法）」を援用して、踏み込むことにした。ここでは、まず、デューイの探究の理論としての論理学の輪郭を素描したうえで、それを彼の道徳理論との関連で捉え直すことによって、「道徳の研究的方法論」－これは、デューイによって体系化されたものではなく、あくまでも筆者が彼の所論を手がかりに個人的に構成したオリジナルなものであるが－を試論的に展開した。そして、かかる道徳的探求の方法が経営理論学の研究に対していかなる積極的意義を有しうるかについて若干の考察を加えることにした。

私見では、デューイの論理的思考の方法論に存する、(1) 具体的現実状況への志向性（これは単なる形式論理を超えた極めて実践的な思考・実験的な論理学だと評価できる）、(2) 非論理的思考（問題状況を感得する際の、経験的直観を重視することに見られる特徴）と論理的思考の統合をめざした包括的な思考過程、(3) 過去－現在－未来へとつらなる経験の意味の連続性（彼は、この意味で可謬主義の認識論に立っている）を重要視する視点は、伝統的倫理学の方法論的枠組みに囚われた、既存の経営倫理学の研究方法を超え、それを拡充しうる有用な示唆を提供するものであると確信している。

もちろん、本稿は経営倫理学の方法論的基礎に関わる考察であり、その意味では、一種のメタ理論のレベルを超えたものではない。したがって、その応用的展開、わけても経営者のリーダーシップ論との関連における展開は、今後の課題としたい。